

暁光会の法人化五十周年によせて

暁光会大阪支部 森下敏行

暁光会のスタートはバタ屋でした。バタ屋というのは、くず紙やくず鉄を拾い集めて売り、生計を立てる職業の



古い呼び名です。いわゆる賤業で、大八車を引いて歩いて道に落ちてくるものやゴミ箱から

くずを拾い集めました。暁光会はそんなバタ屋集落で産声を上げました。

差別される貧しい集落に希望の光をもたらしたいと思つた人たちがいました。

それには生きることそのものが希望になる必要があつたのです。

そして誰がそのひかりをもたらすのか、それは、実は

誰かが持つてくるものではなく、その集落に暮らすバタ屋さんたちそれぞれが光だったので。

そうやって生まれた新しいバタ屋の仕事場には、たくさんの方、今までバタ屋集落に足を運んだことのない人たちが、手伝いに、協力しに、或は、どんなところか一目見にやってくるようになりました。

バタ屋さんの仕事は、ただくずを拾う仕事から希望を紡ぐ仕事に変わりました。

そして希望を担おうとする者には、必ず協力する人も現れるのです。

社会最底辺の仕事が、貧困の中にあるみじめさに負けず希望を持つて生きるとき、実は、自分たちの仕事が社会の一翼を担い、支えているということに気付かされます。

五十年の時が流れて社会も変わり、いま何が困難な状況の救済になりえるのか、とても不透明になってきたと思います。

食べるものがあつて、住むところがある。それは出発点で、とつくの昔にその問題を解決したかのようになわたしたちの社会ですが、生活、子育て、介護、就労など生活全般において、過去に力を合わせて乗り切ってきた困難が個別化され、個人の上に重くのしかかり、一度つまづいてしまうと容易に立ち直ることができません。

人生での失敗、孤独や絶望。

そこには個人の人生の問題があり、再び立ち上がり希

望を持って生きることは、ただでさえ容易な道ではない
のですが、

しかし、いつでも立ち直る道が用意されていること、
その時には協力する人がいること、

締め出すのではなく、受け入れ、
蹴落とすのではなく、協力し、

その先に希望を紡いでいけること、
そうしたものを実現できるといえることが、

私たちが忘れつつある真に豊かなものであることを、
わたしは曙光会から、エマウスから教わりました。



現在の大阪支部作業風景

昭和五九年キャンプ ヤング・エマウス

